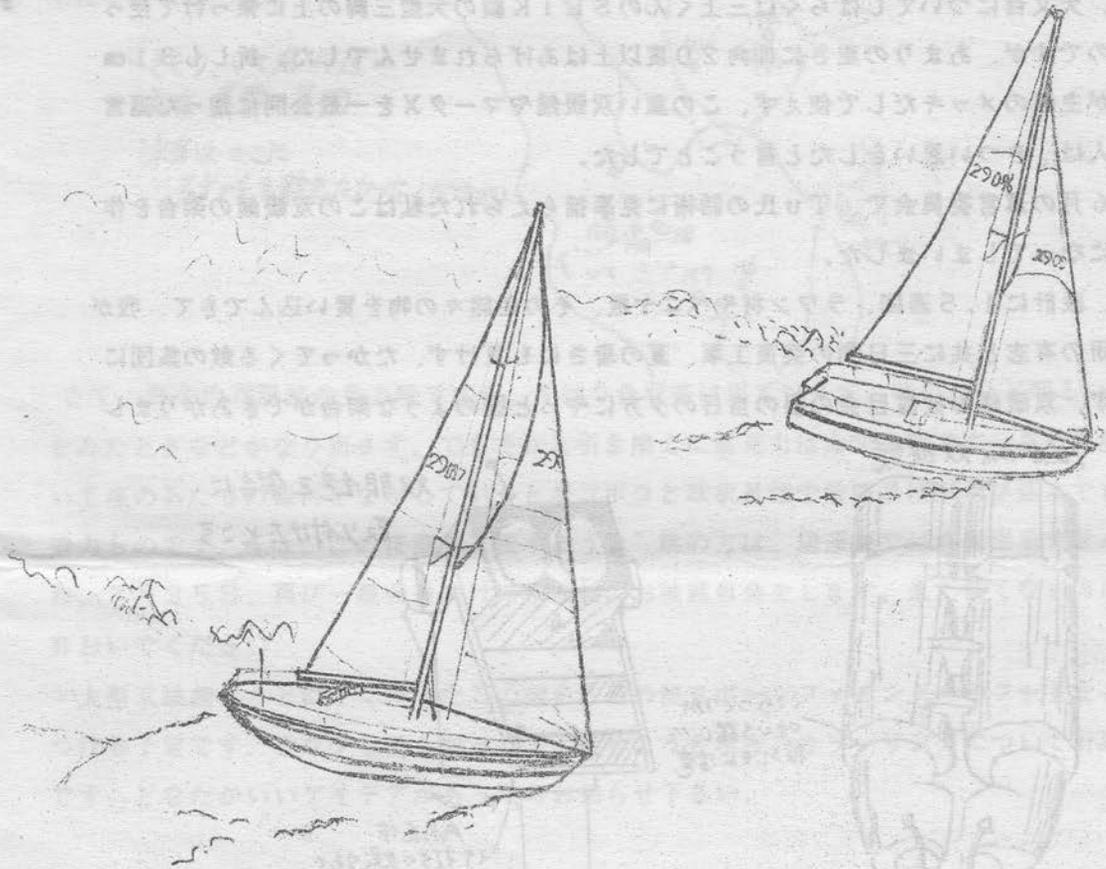


星 舟

No 151

1987
6.7月号





大型双眼鏡がやってきた！！ と 架台製作

Y. TAKATA

口径12.5cmの大型双眼鏡が天文台にやって来ました。この双眼鏡は協栄産業から、安価な大型双眼鏡として今年2月から発売されていたものです。

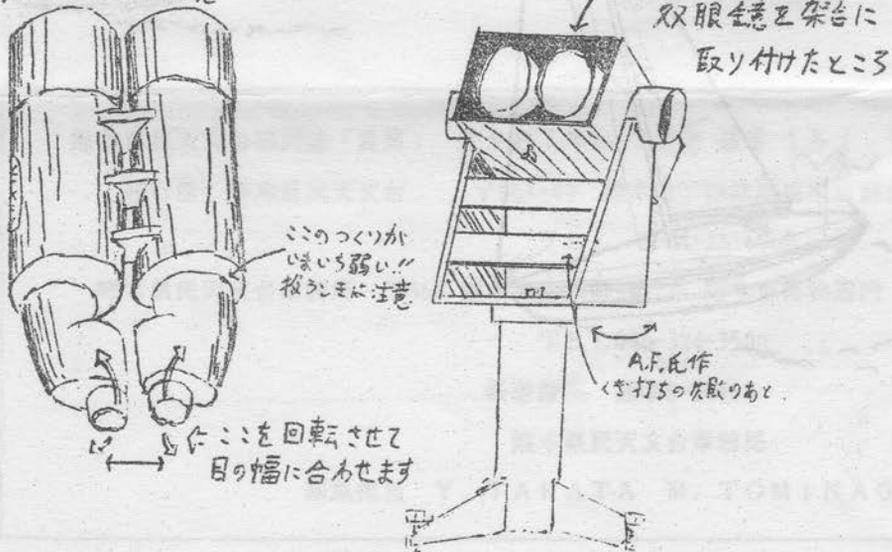
この双眼鏡、短焦点の屈折望遠鏡2本に7×50の双眼鏡をくっつけた様な変な形をしています。倍率は25倍、実視界2.1°です。目の幅をあわせるときは、手前のプリズムとアイピース部分だけを回転させて行います。

始め見た印象は思ったより小さいなーという感じでした。直径12.5cmの対物レンズ2枚もギリギリまで近付けてあるので、そんなに大きくみえません。し、しかしこれがまた重い。天文台についてしばらくは三上くんのSLIK製の大型三脚の上に乗って使っていたのですが、あまりの重さに仰角20度以上はあげられませんでした。折しも31cm望遠鏡が主鏡のメッキだして使えず、この重い双眼鏡やマークXを一般公開に使った運営委員の人は、きつい思いをしたと言うことでした。

で、6月の運営委員会で、Tu氏の話術に見事捕らえられた私はこの双眼鏡の架台を作る羽目になってしまいました。

構想、設計に1.5週間、ラワン材やベニヤ板、その他諸々の物を買って来て、我が熊大天研の有志と共に三日間の突貫工事、夏の暑さにも負けず、たかってくる蚊の集団にも負けず、双眼鏡お披露目会の日の当日の夕方にやっと図のような架台ができあがりました。

12.5 cm 双眼鏡



図を見るとわかると思いますが、双眼鏡は枠ですっかり取り囲んでしまいました。耳軸は、この枠の重心の位置に塩ビ管を取り付け、半円状に削った下の板にただのっけてあるだけです。板と塩ビ管の間には、襖の溝に張るシールを張っています。水平方向の回転は下の板に「トスベール」という商品名のこれもすべりをよくするシールを張って滑らかにしました。ピラーはTu氏からの寄贈です。(聞くところによると花草氏からTu氏がもらったものだそうです。)この架台は完全なフリーストップ式ですから、好きなとき好きな様に向けることができます。(当たり前だけど!!)ただ架台の構造のため50°以上は向けられません。もっともそんな上にずっと頭を向けていると首が痛くなりますが、

とにかくお披露目会ギリギリになってやっと出来ましたが、当日ははじめのうち曇っていて、うちの学生の他、天文台にあんまり来てもらえませんでした。

「暗いところで見るとこの架台なかなか、かっこよく見えるよ」と吉田さんから褒めかたをされました。

・さそり、いて座付近の
主な星雲星団。

(本当はここに
スケッチも載せたかた(たかこ))



さて、肝心の双眼鏡の見え味ですが、やはり色取差は出ています。特に月など明るい天体を見たときなどかなり出ます。でもそれと引き換えに集光力は大変な物です。さそり座、いて座あたりの銀河をながしていくとポコポコと球状星団や散開星団が飛び込んできて迫力ものです。そう、この夜空を”流すような”眺め方は、望遠鏡では真似出来ませんよね。7月25日、再び一般会員向けの双眼鏡のお披露目会をします。まだ観てない方は是非おいでください。

大型双眼鏡と、とにかく作ったこの架台。この後スポーツファインダーやフードをとりつける予定です。また少しでもかっこよく見せようと現在、カラーリングについて計画中です。どなたかいいアイデアがあったらお知らせ下さい。

題名を見て一体なんのことだろうと思われた読者がほとんどと思います。実は、熊本大学天文研究会では毎年6月に昼間群と呼ばれる流星群を早期に観測しています。この昼間群は輻射点の位置が太陽に近い目視ではなかなか捕らえられません。故に観測はFM電波観測で行います。昼間群に対してはFM電波観測の独壇上といつてよいでしょう。

1. 観測方法

観測地 : 熊本市黒髪5丁目(北緯 $32^{\circ}49'$, 東経 $136^{\circ}44'$)

チューナー : パイオニア F-D7 アンプ : テクニクスSU7700

アンテナ : 八木5素子 アンテナ角度 : 天頂固定

受信局 : NHK大阪(但し、6/5~5/10の連続観測時の0時~6時までは、FM大阪)

観測時間 : 1987年5月18日~6月30日 6:00~8:00

但し、6/5・17:00~6/10・21:00迄の間は連続観測。夜間観測されていない時間帯は、放送局が電波を出していないために観測不能。

2. 観測結果

まず、図1を見て下さい。図1は1987年5月18日~6月30日の早朝6時~8時の平均IコーHRです。この図から今年も昼間群の活発な活動があったのがわかります。ところで、昼間群の中心となる流星群は、くじら座 α (極大日5/19、活動期間5月中~末)、おひつじ座(6/6、5月末から6/20)、ペルセウス座 γ (6/8、6月初~中)、おうし座 β (6/29、6月下~7月上)等です。図1によると、5/19にくじら座 α の極大が現れています。他の流星群の極大はこの図からはわかりません。6月初旬から下旬にかけて複数のピークがありますが、複数の流星群が活動している昼間群においては、極大日を明確に決めるのは困難であると思われます。

次に、図2を見て下さい。この図は1987年6月5日17時~10日21時までの連続観測による各時刻毎のIコーHRです。昼間群の輻射点が南中するのは10時~12時頃です。図2をみるとこの時間帯にはIコー数が減少しています。これはK-effectと呼ばれるもので、Iコー数の激減期と輻射点の南中がかなりの精度で一致すると言っているのがわかっています。しかし、昼間群は先ほども述べた通り複数の群が複合して出現しているらしく、K-effectによる輻射点の推定は困難です。

資料を整理したばかりで、まだ十分な検討をしていないので結果発表だけとなってしまう過去のデータを基にもう少し検討してみたいと思います。

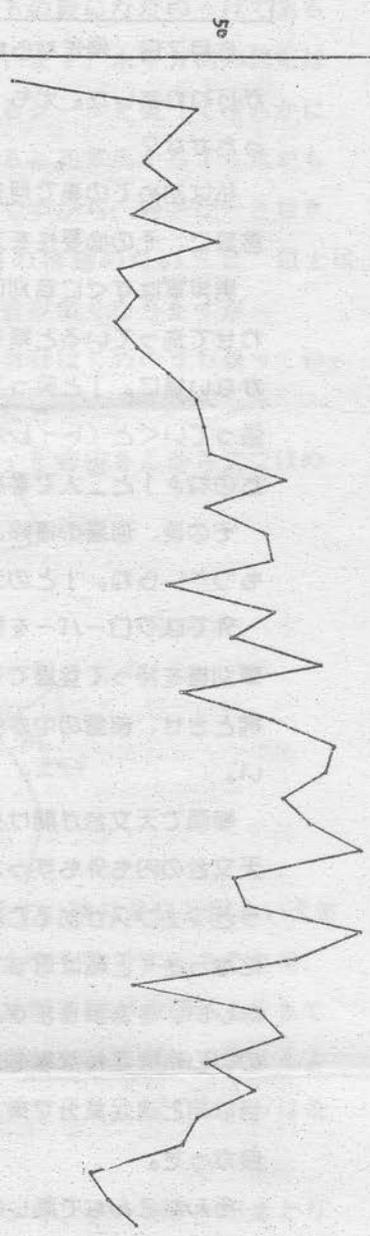
参考文献

日本流星研究会 "天文回覧" No.522, No.525, No.526

熊本県民天文台 "星屑" No.141, (1986)

系藤 馨児, 長沢 工 "アストラルシリーズ2 流星I" P141, (1984)

HR.



0
1987 年
20 25 30 31 4 5 10 15 20 25 30

58.1°

62.7°

68.4°

73.2°

78.0°

82.9°

87.6°

92.3°

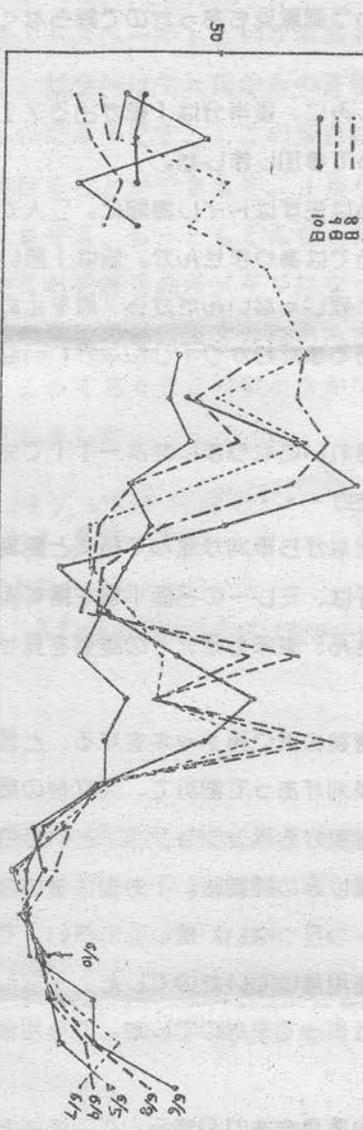
97.1°

大隅赤燈 (1950年)

図 1 1987年5月18日 ~ 6月30日 6時 ~ 8時の平均 H.R. (TST)

HR.

100



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24

図 2 1987年6月5日17時 ~ 10日21時の各時刻での H.R. (TST)

(TST)

6月7日、例年ならきつと梅雨の頃、皆の願いも空しく薄雲のなかでお楽しみの草刈りが行われました。尤も「雨が降ってもある。」という御意見もあったので降らなくて良かったかな？

私は初めての事で何をどうしてやるのが半分楽しみに、後半分は「蛇が出る！」と言う言葉に、その必要性を大いに認め、軍手と鎌を持って参加しました。

男声軍はすぐに草刈に、紅二点？の安達さんと私は先ずはトイレ掃除に。二人で力を合わせて洗っていると草を焼く煙が二人を襲ってくるではありませんか。皆は「悪い虫が付かない様に。」と笑っていました。一本当に「もう狸じゃないんだから！息を止め止め頑張っていくと（トイレガ）きれいなクリーム色である事がわかり「こんなきれいな色だったのね♪」と二人で喜び合いました。

その後、部屋の掃除。「皆さん、食器棚の中はきれいになりましたよー」「でも後何日もつがしらね。」とのシビアなお言葉もありましたが・・・

外ではクローバーを野兎の為にと残す余裕を見せながら草刈が進んで行くと髭島さんが草刈機を持って登場です。陽を受けて草を刈る様子は、ミレーの名画「種を播く人」を彷彿とさせ、部屋の中から見とれていました。髭島さん、来年も是非その雄姿を見せて下さい。

梅雨で天文台が開けられないのでその間に、望遠鏡の鏡に再メッキをする、と言う事で天文台の内も外もすっかりきれいになりました。草刈があって初めて、天文台の周りにずっとフェンスがあることを知りました。草深い田舎家からペンションへ、という位きれいになった（と私は思っています）ので、本当のお楽しみの晩御飯。「労働の後の食事は美味しい。さあ頂きます。」と席に着くとお弁当が一つ足りない。捜しても無い。でも用意のいい私はこんな事もあろうかとちゃんとお弁当を用意していたのでした。－なんて、本当は殆ど遠足気分であつたので、思わずお弁当なんか作つて来たのでした。でも用意して良かった。

そんなこんなで楽しい草刈も終り、その後の運営委員会まで夕涼み。ベンチはあるし、気持ち良い風が吹くし、暈暗なくなってくるし、そうなると、蚊取り線香や団扇があるといいな、西瓜などもあれば良かった、欲をいえば花火とか、総日（は無理か。）・・・等と思ったりして一日が終りました。

今までも毎年こうやって草刈が行われていたのですね。本当に皆様、御苦労様でした。後は”蛇が出ないで野兎が出ます様に”と願うだけです。



弔 辞

「空にさえずる鳥の声、峰より落つる滝の音……」 この“美しき天然”の歌を愛唱しておられた、会員の三浦義一先生は七月三日 天に昇り 星とられました。

自然や人を愛し続けられた先生は、星の美しさに魅せられ、星の写真を撮るために天体望遠鏡を求め、更に機材を調剤地まで運ぶのに、四輪駆動の車まで購入されると言った、熱心な天文愛好家でした。

天文台にも時折お越しになり、元気なお顔を見せておられましたが、残念なことにこの春、病に倒れられました。

済生会熊本病院の院長として、永年その手腕をふるわれ、一方では脳外科の権威者として、おおぜいの方に慕われておられました。ご専門の脳の疾患とは、まことに無情です。永井先生と二人で、水前寺のご自宅にお見舞いに伺いました折り、ベッドの横には愛機の望遠鏡が立ち立っていました。そして「阿蘇に小さな観測所を作りたい」としきりに言っておられたのが耳にのこります。

先生からは、天文台へ度々物心両面のご援助を賜りましたが、中でも先生ご自慢の作品“夜明けのハレー彗星”は、永遠に会員の心に残ることでしょう。

星になられた三浦先生、どうか安らかにおやすみください。そして、たまには地球星の自然や人類も見守ってください。

熊本県民天文台 台長 宮本幸男

インフォメーション

☆ 「天体写真展」のお知らせ

下通り献血ルーム内ギャラリーで天文台会員が撮影した天体写真が7月いっぱい展示されています。まだご覧になられていない方は、献血を兼ねておこしになって下さい。

☆ 「星を楽しむ会」のお知らせ

前回の「双眼鏡お披露目会」が曇り空のため7月25日に延期されました。梅雨明けの素晴らしい夏の夜空をご覧ください。

編集後記

皆さんに6、7月合併号をおとどけしました。「去年はちゃんと12部とどいたぞ。」という声が聞こえてきそうですが、いろいろ理由あってのことですから許して下さい。記事を捜すのが大変なんですから、特にこの時期は。

さて、梅雨もあけて太陽キラキラの夏です。海へ山へと思いは人それぞれでしょうが、事故には十分注意してください。天文台で真っ黒に焼けた読者と会うのを楽しみにしています。

7月の編集委員

私は生まれてこの方、梅雨が明けるまで6月は続くと信じていました。

6月の編集委員

熊本県民天文台機関誌「星屑」 1987年6、7月号 通巻 151 号

発行所 熊本県民天文台 〒861-42 熊本県下益城郡城南町藤山

TEL 0964-28-6060

熊本県民天文台事務局 〒860 熊本市古京町3番2号 熊本市博物館内

TEL 096-324-3500

振替講座 熊本8-24463

熊本県民天文台事務局

編集担当 Y. TAKATA M. TOMINAGA